馬鹿聟

むかしね、ある家で、娘さんさ婿さん貰ったそうです。正直だいい人であったんですけど、昔はバスも車もないし、必ず馬と馬車をつけて能代へ用を足しに行ったそうです。婿さんに「能代に何んだか買いに行ってきなさい」と言いつけたところが、舅婆さんいうに、「あいだよぉ、能代衆って油断ならねよ」って言って、「生き馬の眼も抜かされるっていう、たとえもあるんだよ」って。「だから気を付けて行って下さいね」って言ってやったそうです。ところでその婿さんまだ、ほんーとに正直に受け取ってしまって、「なんだって帰り遅いなぁ、遅いなぁ」と思ったら、馬の眼をピーンと隠して能代の町を歩いて来たそうです。それで遅くなったんだって、言ったって。そういう馬鹿もんもいであったんだよ、って教えてくれたんです。とっぴんぱらりのぴーやらぷー。

渡部あや（檜山　70歳）

〈解説〉

正直者と馬鹿者は常に話題の主になる。この話は馬鹿正直な婿の話。能代の人は生き馬の目を抜くほど抜け目ない、という風評があったのであろう。その言葉を鵜呑みにして馬を目隠しして歩く。従順ばかりでは通用しないという教訓でもある。